

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒業。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



下川氏によるエリア・コンサルティング

昨年夏、レクサスギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本意に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月18日、プレゼンテーションにて

ら新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。鳥取県選出の匠、弓浜紘職人・佛坂香奈子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「農作業着」「古典的で地味」「年配女性向け」という、これまでの弓浜紘のイメージを変えたいと、佛坂さんは制作に取り組んできた。今回のプロダクトも「今の暮らしに合うように」とアレンジを加えた。

これまでのイメージ変えたい



作品のプレゼンテーションをする佛坂さん

サポートメンバーの下川氏に「どこかのお土産屋さんで売っているとかでなく、伊勢丹などデパートで売っているぐらいのものを作ってみたいと思いませんか?」「綿から作っていますという作家が、フルスイングしたらどういうものができ上がるのか見てみたい」と、挑戦を促され進めてきた約1年の制作期間。「セッションを繰り返すことで、思いつかなかったことに挑戦出来たり、まとまっていく感覚が面白かった。プロダクト



バイヤーと商談中の佛坂さん

「現在の暮らしにマッチし、老若男女が毎日身近に気軽に使えるように」との願いを込めた。下川氏とのエリア・コンサルティングの中で出た

が自然に成長していくよううれしかった」と振り返る。

老若男女が身近に気軽に使えるように

仕上げたプロダクトは2種類。リバーシブルトートは、本体に伯州綿でできた帆布を組み合わせ、さわやかな帆布の白と伝統的な織り柄を同居させた。直接手に触れる持ち手部分に弓浜紘を使用し、手紡ぎ手織りの温かみと紘独特のやわらかさ、やさしさを感じられるようにした。両面使えるので、日々のコーディネートに合わせて楽しむ。ショルダータイプは「男性にも使いやすいように」と、古典柄と草木染の縞を使い、つ



完成プロダクト「リバーシブルトート」

佛坂 香奈子 鳥取県／弓浜紘職人

地域の特性をプロダクトに

「伯州綿を感じてもらえるように」とのアイデアを受け、取り立ての伯州綿を縫い付けたオリジナルチャームも制作。「今回のプロダクトのブランドマークにしたい」という。また今回は帆布との組み合わせを形にしたが、「意見を聞き、異素材や派手な色味も受け入れられるんだと知った。どちらのバッグも使う柄や素材(皮やデニムなど)を変えらることで組み合わせは無限」と、今後の可能性を語る。

「地元産」にこだわる

「元々、糸に携わる仕事でしたかった」と振り返る。信州大繊維学部に進学、周囲は光ファイバーや自動車



工房での作業の様子



佛坂 香奈子
鳥取県／弓浜紘職人

1984年鳥取県境港市生まれ。2007年信州大繊維学部感性工学科卒業後、鳥取県弓浜紘後継者養成研修開始(第1期生)。2010年研修修了後に独立し、「弓浜紘工房B」を開業。畑での伯州綿栽培、手紡ぎ、手括り、手織りをベースに現代にマッチする弓浜紘を製作販売している。

「地元産」に強こだわりの、工房近くの畑で材料となる和綿(伯州綿)の無農薬栽培も手掛ける。「紡績糸でもできるが、弓浜紘は、柄行きもいい意味で洗練されてなくて、温かみがあって、丈夫で、山陰の冬を超えるための織物というのが特徴。



工房近くで栽培する和綿「伯州綿」



伝統を引き継いでいくことに「何百年も続いてきたということ、みんなの根っこにあるものという気がする。」「藍」「紘」「綿」というところに戻ってくるではないが、みんなの奥底にあるベースになるものという気がする。それを崩さず、若い世代に思い出ししてもらいたい」との思いを持つ。しかし今回のプロジェクトを通じ、弓浜紘の知名度の低さも痛感。「これからどんどんアピールしていきたい」と意気込む。また「どの家庭どの世代にも身近な存在として、そこにあるものを地道に作り続けていきたい」と話す。

